

天衣無縫。永遠の少年が、心に熱く語りかける。



裸の大将

山下清

その生涯と作品展

- 9月20日(火)→10月16日(日) 午前9時～午後5時 (入場は午後4時30分まで)
9月26日(月) 10月3日(月) 11日(水) 休館
 - 刈谷市美術館 刈谷市住吉町4丁目5番地 Tel.(0566)23-1636
JR東海、名鉄「刈谷駅」南口下車徒歩7分
- 主催＝刈谷市・刈谷市教育委員会・中日新聞社
後援＝愛知県教育委員会
入場料＝一般・大学生600円(400円)、小・中・高校生400円(200円)
※()内は20名以上の団体・前売料金



日本のゴッホ、裸の大将など数多くの異名を持つ山下清。その生涯を、学園時代・放浪時代・晩年の3期にわけ、代表作品(貼絵・油絵・水彩等)を一堂に公開いたします。不思議なユーモアとペーソスにあふれ、人々の心に生きた画家。「山下清の生涯と作品展」を、ぜひご家族でご覧ください。

清の見たゆめ(貼絵) 昭和33年作36歳54cm×76cm

「清の見たゆめ」は珍しい作品だ。清はふらりと旅に出る。そして記憶だけを学園に持ち帰り、たくさんの貼絵に再成した。想像だけで絵をかくことはまづなかった。戦争の悲惨さ、放浪時代のつらい出来事が、夜な夜な清の魂をゆさぶったのかもしれない。逃げまどう子供たちに清の恐怖が投影されているようだ。しかし、この絵の明るさは一体なんだろう。こぼれるばかりの色彩は、みる人を童話の世界につれて行ってくれる。子供たちの人気をひとり占めにしている作品だ。

裸の大將 山下清の生涯

ちょうど関東大震災(大正12年)が起こる前年、
東京下町に一人の男の子が生まれていた。

- 大正11年(1922)
3月10日、東京市浅草区田中町90番地(当時)で大橋清治、ふじの長男に生まれる。本籍は新潟県佐渡郡新穂村。弟妹に源治、辰造、愛子。のち山下姓となる。
- 大正13年(2歳)
関東大震災で焼けだされ、一家は翌年新潟市白山へ。
- 大正14年(3歳)
重症の消化不良にかかり言語障害となる。
- 昭和3年(6歳)
浅草石浜小学校に入学。ひとり虫をとってきて絵をかき小学校3年の時、手工で賞をもらい、すでに字を書くより、絵を描くほうが好きだった。
- 昭和7年(10歳)
父死す。知能のおくれが目立ちはじめ、いじめられて反抗的となる。
- 昭和9年(12歳)
千葉県の精神薄弱児童養護施設「八幡学園」に収容され「ちぎり絵」をはじめ熱中する。
- 昭和11年(14歳)
「八幡学園」顧問医の式場隆三郎氏により文芸春秋に、作品が発表される。
- 昭和15年(18歳)
11月18日早朝、風呂敷包み一つ持って八幡学園から姿を消す。放浪生活を始める。この時より●昭和31年(34歳)まで、南は九州から北は北海道まで文字通り、全国各地を放浪。その間、年に一度の割合で学園に戻り、数多くの作品を制作。そして、また放浪に出るという生活をおくる。「盗まず、争わず」というのが、清の放浪を通して得た処世哲学だった。この二つだけで、敗戦前後の最も苛烈な時代をひとりで生きぬいてきたのである。

学園がアトリエ

この間、ひょっこり母のもとや学園に姿を表わします。とくに学園では、放浪中たまった画想を一気に吐き出すかのように、貼絵や油絵を制作、また克明な放浪日記を書きつづりました。

放浪日記にプロの文学者も驚嘆

八幡学園時代から日記を書く習慣をつけられていた山下清は、放浪から学園に戻ると、ノートに驚くべき記憶の確かさで克明な日記を書きのこしました。全文、改行句読点なし。まわりくどいが何のてらいもない文章は、ふしぎなユーモアと感動があります。

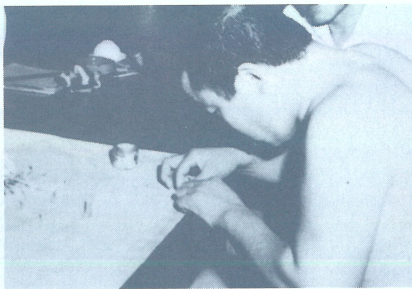
貼絵(ちぎり絵)から素描へ……

昭和9年(12歳)ごろからはじまる山下清の制作活動は、色紙を指でちぎりノリつけする貼絵が中心で、精細をきわめた作品を多数残しています。昭和31年(34歳)から主としてマジックインク・ペンによる風景画をはじめ、美しく、正確な線と点描により一つの絵画的完成をみせます。

- 昭和31年(34歳)
気ままな放浪生活に終止符。以後数年間、全国各地で作品展を開催。観客動員800万人という大記録。
- 昭和36年(39歳)
放浪癖も直り、式場隆三郎氏と共に、フランス・ドイツ・イギリスなどヨーロッパ一周スケッチ旅行に出かける。
- 昭和46年(49歳)
突然の脳出血で死去。



貼絵製作に励む清少年 昭和12年12月22日・15歳



貼絵製作に励む 昭和31年・34歳



映画「裸の大將」主演小林桂樹と 昭和33年・36歳

主な出品内容



↑長岡の花火・貼絵 昭和25年作・28歳 53.4cm×76.4cm

清は、駅の待合室に泊まりながら、信濃川の川開きのポスターをながめている。汽車道を歩きつづけて新潟県の長岡までたどりつく日数を、花火の日にあわせるために、ゆっくりとスタートする。どこの駅にも花火大会のポスターが貼ってある。それを毎日ながめながら、既に清の心の中には花火があがりはじめています。

八月中旬、予定通り長岡に到着する。清はもらいためた握り飯をほおばりながら、信濃川河畔で日の落ちるのを待つ。空が暗くなるにつれて次第に星が輝く。あ、星が流れる。そのころ、清の放心はいよいよ空白に近くなる。

集った大群衆は、自分も含めて河原の石ころとけあってしまう。夜空にシュルシュッと花火玉があがる。そして満天の花。彼の心を通っていた長い長い時間がこの一瞬に圧縮されて、山下清、一代の代表作が誕生した。

- 学園生活時代の作品(12才～18才)
昭和9年「八幡学園」入園当時より、昭和15年最初の放浪の旅に出る迄の作品。(貼絵45点)
- 放浪時代の作品(18才～32才)
昭和15年後期より昭和29年前期まで、断続的に求めた放浪の期間中、時たま学園にもどって仕上げた作品。(貼絵20点)
- 油絵の作品
昭和24年頃より始めた油絵の秀作。(油絵3点)
- ヨーロッパ旅行における作品(39才～43才)
昭和36年ヨーロッパへスケッチ旅行に出かけ、帰国してから昭和40年迄にまとめた作品。(水彩4点、素描1点、貼絵4点)
- “夢”を自由奔放に描いた作品—「清の見たゆめ」(貼絵1点)
- 工芸作品
 - 石版画—昭和31年(34才)新しい試みとして、石版画の制作を始める。(4点)
 - 染 絵—昭和34年(37才)沖縄訪問の折り、初めて紅型手法による染絵を試みる。糊を使う筒描きというむずかしい技術をこなして描き上げた大作。(1点)

参考資料展示品

- 学園日誌と漢字練習—昭和14年(17才)～15年(18才)「八幡学園」において書かれたもの。(80点)
- 放浪日記—放浪の思い出を克明につづった自筆の日記。(全13冊)
- 放浪行程図—15年半におよぶ全国放浪の足跡<イラスト>。(1点)
- 放浪日記さし画—放浪中の思い出をスケッチブックに描き残したデッサンによる作品。(10点)
- 放浪をやめる誓い—八幡学園長に渡した放浪をやめる誓いの文。(1点)
- 放浪中の認識票—(1点)
- 遺品—放浪中使用したリュックサック、巾かた、帯。(3点)
- 習字—(3点) ●色紙画—(2点)
- 旅先から無事の便り—現在残されている旅先からのたった1枚の手紙。
- レッテル—常磐線我孫子駅の駅弁のレッテル。(2点)
- 関係出版物—これまでに出版された山下清の本。(15点)
- スナップ写真—八幡学園クリスマス会のついでから、放浪生活を経て、ヨーロッパ旅行までの思い出のスナップ写真。(30点)
- 寄稿文—バーナード・リーチ、安井曾太郎、梅原龍三郎、谷内六郎
※会場の都合により、出品内容に変更のある場合がありますのでご了承ください。